

2006年度 大学院法務研究科

法学既修者認定試験

刑 法

(問 題)

問 1

甲（男）とX（女）が公園を歩いていたところ、酩酊したA（男）がXの髪をつかむなどの暴行をはじめたため、甲はXを助けてその場を去ったが、腹の虫が治まらないので、Aをボコボコにしようと思い、仲間の乙に「Aと直談判しに行くので付き合ってくれ」と誘い、行く途中で「場合によってはナイフを使え」と言ってナイフを渡した。2人はAのいる公園に行ったが、甲は公園入口にとどまり、そこから100メートルほど離れたところにいるAのそばに乙を行かせたところ、突然Aが乙に殴りかかってきたので、乙はAに対して殴ったり蹴ったりした。Aがひるんだので、乙はこれで十分と思い、甲のいる公園入口に帰ってきたが、その後Aが追いかけてきたので、乙はカッとなり殺意を抱いて、持っていたナイフでAを刺した結果、Aが死亡した。

甲および乙の罪責について論ぜよ。

問 2

医師甲は、入院患者 A を殺害しようと考え、看護師乙に対して、致死性のある薬剤を治療効果のある薬剤であると偽って A に注射するよう指示した。乙は、当該薬剤が劇薬であり、通常使用されることはないことから、甲が A を殺害しようとしているのかもしれないとの疑念を抱いたものの、日ごろから好意を寄せていた甲の思いを果たしてあげたいと考え、指示に従うことにした。そこで、乙は、A の病室へ行き、A の名を呼んで返事をした者に対して注射をしたが、実はその者は A と同姓の B であった。人違いに気づいた乙は、直ちに解毒剤を投与したが、当初注射した毒薬が致死量に達していなかったため、B は死亡するに至らなかった。

甲および乙の罪責について論ぜよ。